義務教育学校　黒島小中学校（黒島はまゆう学園）　令和４年１０月１８日（火）文責：校長 松尾　信広

黒島魂　～しまごころ～

『みがきあい（キラキラ）』　『ささえあい（ニコニコ）』　『わかりあい（ワクワク）』

学校の働き方改革について

運動会がいよいよ今度の日曜日（１０月２３日）に迫ってきました。天気は…大丈夫と信じています。

今回は、育友会の実行委員会でもお話させていただいた、学校の働き方改革について書かせていただきます。

平成６年４月１日、小学校教師をしていた父親の背中を追うように、私も小学校教師となりました。若手の頃、高校時代の友人たちと集まり仕事の話になると、よく言われていた言葉が「先生はよかねぇ…。休みがあって」です。それに対して必死に、学級のことがあるので簡単に休みが取れないことを伝えていたのを覚えています。この頃は、まだ教師という職業は、言葉は適切かどうかわかりませんが「楽」な仕事であると思われていたようです。

それから時は過ぎ、学校でも中堅ぐらいのキャリアになった頃でしょうか、友人たちが「先生も大変やねぇ…」と言うようになってきたのです。中には「大丈夫か？」と心配をしてくれる友人もいました。いつの間にか、教師は「大変」な仕事という認識に変わっていたのです。

今、全国的に教師不足だと言われています。何より深刻なのが、教師を目指す若者が減少しているということです。それは長崎県も例外ではありません。

学校は、これまで「全ては子供たちのため」と信じ、色々なものを背負い続けてきました。その中には、必ずしも学校が背負う必要のないものも多く含まれています。そして学校は、一度背負ったものを、下ろすということが苦手なため、その量が減るということは、これまでほとんどありませんでした。私が教師になったころは、背負う数は限られており、そう大きな問題はなかったのかもしれません。しかし、戦後続いてきた日本の成長が一段落し、熟成の時期を迎えるとともに人々の価値観は多様化していき、「個」が重んじられる時代になりました。加えて近年では、SNS の普及等により、その「個」の発信力は強まる傾向にあります。当然ながら、学校に求められることも年々増加していきましたが、学校はこれまでどおり「全ては子供たちのため」と信じ、それを背負い続けてきました。その結果、学校のキャパシティを超えてしまい、様々な問題があふれ出てきました。それでも、学校は必死に対応をし続けていたところ、いつの間にか、学校という職場環境は、極めて過酷であるということが、世間の認識となり、それが若者の教師離れにつながっていくという負のスパイラルが出来上がってしまったのです。「全ては子供たちのため」と信じてやってきたことが、結果的に「子供たちのためにならない」状況を作ってしまったのです。これは、大いに反省しなければならないことです。

現在学校では、背負っているものを、いったん全部おろして、整理をし、必要なものだけを背負い直すことを行っています。その作業の中で、確認をしたことは、学校が最もやるべきことは何かということです。その何かとは子供たちに**「確かな学力」**を身につけることです。そして、そのために教師が最も力を注ぐべきことは**「授業」**であるということです。（どのような授業であるかは、学校だより１１号をご覧ください。学校 HP にも掲載中です。）そのため教師一人一人が**「授業」**に全力で向き合うことができるよう、環境を整えています。具体的な例として、日課の調整や、ICT 機器の積極的活用により、会議の回数や時間を減らし、個人執務の時間を確保しています。また、個人面談との一体化により通知表の１，２学期の所見を廃止しました。そして、何より「全ては子供たちのためとがんばることで教師が疲弊していては、結局は子供たちのためにならない」という理念のもと、超過勤務時間を極力減らす取組を行っています。しっかりと休養を取ることで得た教師の心身の健康は、子供たちの**学力向上**に直結すると確信しています。

昭和や平成の頃の教師像と比較すると、目に見える部分では物足りなさを感じるかもしれません。しかし令和時代の教師は、**「授業」**作りという、目に見えにくい部分に全力を注ぎ、これまた少々わかりにくい子供たちの**「学力向上」**（テスト等ではわからない学力があります。学校だより１１号に書かせていただいています。）に努めていることをご理解いただきますと幸いです。

運動会はお世話になります。どうぞよろしくお願いいたします。